

## フェイクニュースの社会への影響

### 【物語編】

#### ■カフェ

佳乃が座って書き物をしている。そこへ春菜がやってきて隣に座る。

春菜「佳乃～、聞いた？なんか、うちの学生が警察に捕まったらしいよ。」

佳乃「えっ、知らない。何やったの？」

春菜「えっとね、漫画をスキャンして、無断でネットにアップしたとか言ってた。」

佳乃「えー、そうなの？どこの学部だろう。知ってる人かなあ？」

春菜「そこまでは聞かなかった～。誰だろう・・・ツブヤイターとかで話題になってないかな？」

春菜はスマホ、佳乃はタブレットで調べる。

佳乃「あっ！これ・・・かなあ・・・えっ？？まさか？？田中亮って、特定されてる！」

春菜「え～！亮なの？でも、亮って漫画あんまり読まないって言ってなかった？ちょっと意外。」

佳乃「でも、しっかり「田中亮」って書いてあるよ。あーあ、亮、いまどうしているのかなあ。」

二人、嘆息する。

そこへ亮が首を傾げながら通りかかる。

春菜が亮を呼び止める。

春菜「えっ亮？？ここにいて大丈夫なの？」

亮「はあ？」（きょとんとして）

佳乃「もう釈放されたの？」

亮「何の話？？というかさっきからどうも周りの目が気になるというか・・・俺を見て、みんなヒソヒソ話してるような気がするんだよね。なんか聞いている??」

他の客が、亮の背後の席でヒソヒソ話をしている。

佳乃「だって、逮捕されたんでしょ」

亮「逮捕？俺が？いつ？」

春菜「漫画よ、ま・ん・が！。あ、時間だ！ ちょ、ちょっとごめん。あとで詳しく聞かせてね！」

春菜、そそくそと立ち去る。  
亮、首を傾げて。

亮「漫画？なにそれ？  
（佳乃のほうをむいて）  
漫画ほとんど読まないから、話についていけないってのはあるけど・・・」

佳乃、タブレットで記事を見せる。

佳乃「ほら、これ。【漫画をスキャンして作者に無断でアップロードした犯人逮捕】っていう記事。」

亮、あっけらかんと。

亮「うん。このニュース読んだよ。そこまでして漫画をシェアしたいのかなって思った。このニュースがどうかした？」

佳乃「この犯人の名前が特定されちゃってツブライターで広まってるの。「田中亮」って。」

佳乃が、タブレットを操作してツブライターの画面を見せる。  
亮、驚いて。

亮「えっ！？俺やってないよ！俺が漫画読まないの知ってるでしょ？」

佳乃、不思議そうに。

佳乃「ほんとに心当たりないの？不正なアップロード。」

亮「不正？アップロード？ちょっと何言ってるか分からない。」

佳乃「ふーん・・・ほんとに知らないみたいね。これはアカウント乗っ取られたのかな？それか、このアップロードサービスを使用した時にパスワードが流出したとか？」

亮「うーん、それはない。なにしろ俺、このサービス使ったことないもん。おっかしいなあ、でも確かに俺の名前だ・・・」

佳乃、考え込む。

佳乃「じゃあ、何で「田中亮」って、、。もしかして、同姓同名??」

亮「えー、まさか。んー、確かに、よくある名前かもしれないけれど、でもなあ。」

佳乃、タブレットで検索。

佳乃「まあ、実際に会うことはなくても世界は広いからね。ちょっと検索しただけで「田中亮」っていう同姓同名の人が5人出てきたし。ツブヤイターだけでも5人いるし、そのうち、3人は大学生みたい。」

亮「そっか、その人たちも俺と同じ被害にあってるのか・・・」

佳乃「そうだね。同姓同名で大学生っていうのも同じなら信じちゃうかもね・・・」

二人、うーんと考え込む。  
そこへ春菜が戻ってくる。

春菜「ねえ亮、結局逮捕されたの？されなかったの？」

佳乃「ああ、それね、同姓同名の別人みたいよ。」

春菜「同姓同名～？？そんな漫画みたいな話を信じろと??」

亮「ああ・・・ここに思いっきり信じちゃってる奴がいた（泣）」

春菜「やったんでしょ？」

亮「やってないよ！！はあ・・・仲間内ですらこれか・・・」

亮、ため息をついて。  
「俺、いったいどうたらいいの？・・・」

## 【解説編】

### ■カフェ

天の声「亮くん、とんだ災難ですね。」

亮「本当に、困っています。身に覚えがないことなのに、周囲で勝手に話が進んでいくので・・・」

天の声「今回の話のように、同姓同名だったり、所属、属性が似ていることで、犯人と間違えられることも少なくありません。

実際にこんな例があります。とある街で誘拐事件が発生したのですが、それと全く関係のないAさんは誘拐犯と同姓同名でした。しかも、事件が起こったのは隣町で、犯人と年齢も同じ。そしてSNSも使用していたそうです。結果、Aさんは知り合いから犯人扱いされてしまいました。今回の亮くんのように、同姓同名で属性も似てるが故に起こった事例です。」

春菜「知り合いの人たち薄情ですね。その人のことを知っているんだから、本人に確認すれば良いのに。」

亮「いやいや。春菜、思いっきり信じてたじゃん！」

天の声「そうですね、頭ごなしに決めつけるよりも前に、真偽を確認する事が大切です。

同姓同名の他に、こんな例もあります。BさんはSNSでのなりすまし被害に遭い、誤解によって職を失いました。その後、発信者情報開示請求によって加害者を特定し、慰謝料を請求したそうです。しかし、失った職や信頼を取り戻すのは容易なことではありません。まずは自分自身のアカウントをしっかり守ること。そして、不確かな情報、誤った情報を拡散させないことが大切です。」

佳乃「そうか、間違った情報で誰かに大きな損害を与えてしまうこともあるんですね。」

春菜「私、いつもだったらそんなことあんまり考えずに、SNSで情報をシェアしちゃってたなあ。」

天の声「情報をシェアすることもまた情報発信にあたります。情報をシェアしただけで、裁判になった例もあります。シェアするだけであっても、発信する内容には責任を持ちましょう。」

天の声「春菜さんも佳乃さんも、今回はシェアをしませんでした。しかし、もししていたら、拡散した情報を訂正することは難しかったですよ。

また、仮に正しい情報だったとしても、つまり亮くんが真犯人だった場合であっても、その情報を拡散してはいけません。」

春菜「え？どうしてですか？」

天の声「犯人の情報を拡散するということは、犯人を私的に制裁することに繋がります。それは、市民の役目ではありません。ネットの表現の自由でもなく、いわば行き過ぎた正義感です。対象者を特定したり、対象者の自宅住所や経歴、顔写真など個人情報公開することは慎みましょう。」

一同「分かりました！！」